

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和六十年十二月十五日 発行(毎月一回・十五日発行)

(通第四三七号)

絶対他力の真教……………近角常観……………(1)

浦島の子……………福島政雄……………(6)

次 見敬得大慶……………井上善右卫門……………(9)

慈光日誌抄……………西元宗助……………(12)

目 『法燈』——病中雜記……………酒井演幽……………(15)

木村無相師の御法信(二)……………岩崎成章……………(18)

歎異抄第五章……………花田正夫……………(22)

慈光

第三十七卷 第十二号

絶対他力の真教

自力他力という言葉は、一応何人も解り易き通俗な文字なれど、実際に於ては極めて甚深微妙な意味を含むものである。従つて是を通俗に用いることは、甚だしき誤解に陥り易き危険がある。

殊に経済的、政治的に人の懐をあてにしたり、他人の援助を拝み倒したりすることを他力本願と云う嘲弄的造語が流行する。こは宗教的救済の根源とも謂うべき神聖なる言葉を濫用するものにして、不謹慎も亦甚だしと云うべきである。されど世人がかくの如く濫用を為す所以は、かりそめにも宗教家及び信者のなかに、誤解され易き思想及び行為なきや否やを顧みなければならぬ。

先ず他力と云うを他力にたよると云う意味に解するならば畢竟空虚なるそらだのみと云うことになる。それを当にして働かず居るならば、恰も旅人が歩行せずして路に坐して居るようなものである。これは他力ではない、無力である。すでに他力と云う以上は他より力が加えられねばならぬ。路に疲れたる旅人に対して自動車が出来て乗せてく

近角常観

如何に疲れた人も大活力を得るの
親鸞聖人が他力というは如来の本願力なりと喝破
せられたのはこの活力の本源を闡明せられたものである。

次に他力と云うを他を力として、努力すると云う意味に解せんか。こは前の無力よりは一見立派そうに見えるが、その実、他を力として自分が努力奮闘することで、畢竟自力の変形に過ぎない。一步進んで他よりも力を与うるが、自分もまた努力するという意味に解せんか、是また半他力半自力にして、結局徹底したものとならぬ。親鸞聖人が他力中の自力と云われたのが是である。如何に真面目に称名念仏するも、努力主義律法主義に陥りて不徹底に終るのである。人間相対的力を以て、如何なマラソン競争を為すとも、終には疲労困敗に終るであらう。

此の如く論じ詰めれば、自力と云うは人間相対の力を以て努力すると云うことで、結局絶対の光を見出さぬことである。換言せば、人間の小智を以てはからいをなし、人間の微力を以て剛慢にも無理推しせんとする我見の骨頂に過

ぎないのである。これが自力と云う言葉の真意義である。然るに世人は自力というはエラ、イことのように思い、近頃は宗教上にまで自力宗などというて、りきみ居るなどはあまり感心しない。恐らくは禪宗の祖師達が、我は自力なりとは云われなかつたのであらう。

それ故他力ということ、衆生から仏に向うと云う方向では決して徹底せぬ。若し其方向を取つたならば、半他力半自力である。要するに相対的他力である。真の他力と云うは絶対他力の意味である。絶対他力は仏の力が衆生に対して絶対無限に与えらるゝことである。親鸞聖人は是を名づけて如来廻向と云われたのである。即ち如来の本願力廻向である。この絶対他力に対して、衆生より仏に向う方向を、自力廻向と云うて嫌貶せられたのである。

曇鸞大師の『論註』に利他の意義を釈して、「他利と利他を談ずるに左右あり。若し仏よりして言はば宣しく利他と言ふべし、若し衆生よりして言はば他利と言ふべし。今將に仏力を談ぜん。是故に利他を以て之を言ふ。当に知るべし、此意なり」とあるは、衆生より仏に向う廻向の方向を転換して、仏より衆生に加えられる如来廻向を談ずる本願他力の根源と見ることが出来る。聖人が他利利他の深義と推称して、他力真宗の根本枢軸とせられたは、真理を洞見せらるゝ、爛眼と仰がざるを得ぬ。

既に利他を以て如来の利他と見る以上は、自利もまた如来の自利たらざるを得ぬ。此に於てか如来の自利利他圓滿の永劫の修行を偈ざるを得ぬ。經に「鹿言にして自ら害し、彼を害し、彼と此と俱に害するを遠離し、善語にして自ら利し、人を利し、人と我と兼ね利することを修習す」とある法藏菩薩の自利利他成就したまえるが、絶対他力の本願力廻向これである。

他利利他と云うことは、如上の廻向の方向転換を指示するのみならず、尚他力救済の絶対価値を顕わして、仏自身が利他にして、衆生自身は他利なりと云うことを直説することになる。この意味に於て、聖人は「若し自ずから仏を以て云はば直しく利他と言ふべし。自ずから衆生をして言はば他利と云うべし、云々」と訓読せられた。此に於てや如来廻向の絶対積極の力は、衆生罪惡の消極を救済し尽して、人生活躍の力を与うることになる。

全体他力と云うことが徹底せざる原因は、絶対他力でないからである。例へば自利は自力にして利他とならぬ場合は絶対他力にはならぬ。原因が自力にして他の結果を得んとしても是亦不可能である。兎角他力と云うことは自己が利益を得んとして他力を頼んだり、自分は働かずして、他の結果を攫まんとしたりすることが皆誤れる他力である。それ故古来他力を非難する点は、他力は仏因果の根本

本典
証卷
二略
三六
四系
四系
四系

行卷六

たより

邪地を排す

1-10

大念仏28

証卷 一五
因果

原則に反するかのように見ゆるからである。若し自分が働かずして結果を得るならば、無因果である。若し他人が働いて自分が結果を得るならば、他因果と云わねばならぬ。これ皆自力を根拠として、利己主義に陥りて誤れる相対的見地で他力を誤解するからである。修養の
聖人の絶対他力は原因も他力、結果も他力、行も信も他力、一として他力ならざるはない。故に「教行信証」に、「若しは行、若しは信、一事として阿弥陀如来の清淨願心の廻向成就したまふところに非ざること有ることなし。因無くして、他の因の有るには非ざる也」とあり、又「若しは行、若しは信、一事として阿弥陀如来の清淨願心の廻向成就したまふところに非ざること有ることなし。因淨なる故に果もまた淨なり」と云われたる絶対他力の徹底的な見地を示されたのである。是が即ち教、行、信、証、皆悉く如来清淨願心の他力廻向にして、信樂開發の一念、極速に我等が胸中に徹到、満足せしめらるるものである。要するにこの如く絶対他力廻向である故に、人生如何なるものと雖、この廻向に与らざるものはない。貧富の別なく、賢愚の差なく、男女老少を問わず、貴賤縊素を簡はず、殊に大小の聖人も、重軽の悪人も、皆等しく救済されること恰も衆水の海に入つて、鹹一味なるが如くである。数学に一切の有限数に無限を乗ずれば、皆無限となる如くであ

の意
信卷五

蓮華 ↓

度び徹底すれば、経済的にも、政治的にも、建現するのである。資生産業即是実相を如実に露わすものである。殊に吾人の信ずる絶対他力は大積極であることを極言せねばならぬ。とかく他力という言葉には消極的に解され易き弊がある。如何に物質的に空虚なる者も、亦精神的に煩悶せる者も、一度び絶対無碍の大道によりて満足せしめらる、時は、身心悦豫の極、歡喜踊躍して、茲に感謝報恩の情溢れ出する次第である。此に於て「孝子の父母に帰し、忠臣の君后に帰して、動靜已に非ず、出沒必ず由ある如く」知恩報徳の経営止むべからざるものがある。

此卷要典ハニ
修養師ハ
善道也

全体知恩報徳の心なるものは絶対救済の満足よりほとばしり出るものである。聖人は「専修にして雑心なる者は大慶喜心を得ず、彼の仏恩を念報することなし」と云われた。たとい如何に真面目に努力すれども、中心悦服して大満足の境地に達せずば、真の知恩報徳は出来ないのである。国家的奉公、献身的義勇、皆これ信仰徹底の反射として始めて真の光彩を放つものと云わねばならぬ。

愚劣動止云
他力金剛心也
信卷五

此の如く信仰の一念に人生の究極を尽して、生きながら前念命終、後念即生の境地に達するものである。故に是を横超の金剛心と云うのである。是れ生きながら生死を断じたるものである。それ故捨て身の活躍が出来るのである。こは此世に於ける信仰徹底の反射である。然るに宗教とし

る。此に於て一切人類絶対救済の根本他力が開現されるのである。

以上絶対他力を説くに多少教理的に涉りたるため、聊か難解の嫌はあれど、聖人の深意を明かにせんため、其特徴とも謂うべき枢要を挙げた積りである。されど現代の如き一世挙つて経済問題、物質救済を強調する時勢に於ては、頗る不適切なる感があるかも知れぬ。されど吾人の見地より見れば、世論こそ却つて不徹底に終らぬかを杞憂するものである。

何となれば、一方には物質的に国家的救済を説き、一方には民衆的自力更生を説く如きは相対的あゆみより陥つて、結局蛇蜂とらずの嫌はなきか。一方に王道政治を標榜して、一方に武力統一を説くは、相容れざる恐れなきかはれ頗る関心すべき点である。

吾人の信ずる絶対他力の救済はあまりに精神的であり、あまりに主観的であつて、多くの宗教が批判される如く、自分よがりの空想的満足であるかの如く誤解されるかも知れぬ。これ畢竟絶対他力の体験がないからである。如上叙説するが如く、行も、信も、因果も、果も、すべてあらゆる精神全般が絶対に救済されて、活潑、潑地の境に達する時は、必ずず人生的に活躍して、経済的にも、物質的にも大活動を顕現するものである。絶対的に精神なるが故に、一

ては永久の世界に於て法性真如の境界に達し、尽十方無碍の光明に一味にして、衆生済度の力を此人生に現わすようになる。これ往相廻向の真実証に達すれば、還相廻向の利他の利益が反射し来るのである。

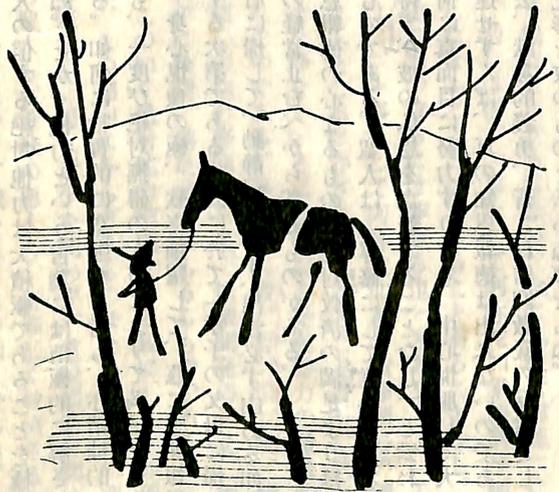
此の還相廻向なるものは、吾人が未来永久の活躍の理想たるのみならず、又この人生に反射し来つて深遠広大なる人生観を与うるものである。即ち煩惱の林、生死の園たる現世に於て、如来慈光の照耀によりて、人生を莊嚴せらるることである。即ち順逆諸種の因縁純熟して、我等罪惡の衆生を救済したまう。大聖權化の善巧方便である。而してこの往相の廻向も、還相の廻向も如来の本願力によりて信樂開發の一念に、我等に廻施さるゝのである。これが絶対他力の真宗教である。最後に聖人の真面目を讃嘆せんが爲に、聖人晩年の作たる「略文類」の聖訓を拝読して筆を擱く。

二五二六

「若しは往、若しは還、一事として如来清淨願心の廻向成就したまふところに非ざること有ることなしと応に知るべし、是を以て、浄土の縁熟して調達闍世をして逆害を興ぜしめ、独世の機を憫みて、釈迦韋提をして、安養を選ばしめ給へり。つらく彼を思ひ、静に此を念ふに、達多闍世博く仁慈を施し、弥陀釈迦深く素懐を顯はせり。これによりて論主は廣大無碍の淨信を宣布して、あまねく雑染垢

忍の群生を開化し。宗師は大悲往還の廻向を顕示して、慇懃に他利他の深義を弘直せり。聖權の化益、偏く一切凡愚を利せんが為なり。広大の心行、唯逆惡闡提を引かんと欲してなり」

(病中口話)



伊藤
徳義
仙陀

今朝の朝け 露もやと秋草やまよひをき ぼろの光
長生年記 三十九
伊藤徳義

伊藤左千夫歌集抄

奇特なる信心の行者こそありけれ。越中の人井沢清次郎となむ云えりとぞ。求道誌に記されたり。実に信心の行者ほど嬉しく有難く覚ゆるはなし。即ち尊き仏縁を讃じていささか懐を述べ。

人心あやふきものと思ひ知り、尊き名をせめて申すも

吾がこころ暗くしあればみ仏の光こほし止む時もなし

よき人の心とほれるみ教にわが世百年樂しきを經め

鎌倉なる大仏をろがみて詠める短歌

鎌倉の大きほとけは青空をみ笠と著つつよろづ世までに

もろもろを救はむためと御仏の大き御像ここにまつりし

御仏のはなつ光はとことはに国のもろ人まねくすくはむ

天つちのなしのまにまに鳴く虫や咲く百草や弥陀を知る

らむ
しわざ

浦島の子

浦島太郎の話をはじめて読んだのは、私の小学時代であった。小波山人の日本昔噺浦島太郎というのであった。私はその本ではじめて浦島の子の物語を知った。その頃はただ面白いとおもって読んだだけであった。別に深い肝銘とでもなかった。

その時からもはや三十余年の歲月は過ぎた。此の三四年私は浦島の子の物語を自分の問題として感ずるようになった。

おもえば数年前、西洋に向って出で立ったときの私は、正に乙姫のまぼろしにあこがれて龍宮城へと向う浦島のおりであった。父母を失うて悲しんで居ても、私の心は決して一筋に親にかえるという心ではなかった。否私の心はむしろ親に背を向けていた。一日々々と死に向っていた病床の父を看護しても、私の心はいつしか西洋へと飛んで居た。そして冷たい心は私の生命に動いていた。その冷たい心が父にひびいて、病床の父を一人淋しく思わせた。しか

ドイツ 中世の国民叙事詩、北海伝説の1230頃、アスラ危難に耐えし徳姫を保護す
グードルン姫

福島政雄

も私は無自覚のまま、父に対して一かどつくして居るような気持で居た。父は死んだ。そして私は西洋へ行った。西洋二ヶ年の私の生活は龍宮城の浦島の生活のようなものであった。親を忘れて相対煩惱の中にひたるような生活であった。私の魂はまぼろしの乙姫様にあこがれた。グードルン物語のグードルン姫のような女性がドイツの国にはあるように思った。まぼろしは迷いの世界を現じた。迷いの眼には様々の美しいものが見えるようであった。ベルリンの夏、ギリシャの春、チューリンゲンの秋、ジュワルツワルドの冬は迷いの世界にあらわるる龍宮城の四季の窓であった。私は迷いの心眼にその四季の窓の景色をあかずながめた。

迷える私は迷える心のみままで西洋からかえった。そして二ヶ年、三ヶ年、四ヶ年と経過した後、今更のように自分の如実の相に目がさめて来た。

浦島が龍宮城の乙姫様を振りきって故郷へかえる動機は、

両親の瘦せやつれた姿をまぼろしに見たことにあると伝えられてゐる。そして丹後の水のかえつた浦島は、親もなかり人もない淋しい故郷を発見した。浦島は玉手箱を開けずには居られなかつた。そしてそこに白髪の老人たる自己を見出したのであつた。

西洋からかえつた私は、今更のように産みの親無き世界に気がついた。それは蕭々として淋しい世界であるといつた。私は自分の煩惱を訴えるところが無かつた。しかも「坊ちゃん育ち」の私は、此人生に甘える心から、生みの親に代るべきものを様々の方面に求めた。求めて何もかも得られなかつたその幻滅は私の生活の行路を一入淋しくした。私は浦島の子となつた。四顧茫茫知らぬ人の国にあるように感じた私は玉手箱をあけずには居られなかつた。私の玉手箱には煩惱愛欲の雲霧が封じこめられてあつた。その玉手箱をあけた私は、自己が愛欲煩惱に覆るゝ身であることをつく／＼と感じた。そこに自分の如実の相を発見した。

今までは自分をまだ若いと妄想していた私は急に自分の双鬢の白くなつて居ることに気がついた。親を忘れてながい間さまよつていた自分は、まことに法華経の喩にある窮子であると感ずるようになった。かほどに親に背を向けて逃げまわる私を、大悲の御親は忘れたまわず、捨てた

信解

一子地 1. 初地 2. 仏地

のさまよい行く私のうらぶれのすがたを見とおして、その有様をあわれみ、これに無限の同情悲愍の涙をそそぎたまふ大悲の御親は、この無自覚の私に極愛一子地の自覚を促したまふ。私は如来の一人子であり、大悲の如来は私の心に起る生みの親の追想、思慕を縁として私の魂を呼びさましたまふ。私は私の魂に催す一念の動きも大悲廻向の賜物であることをここにつく／＼とおもひ知るのである。

無慚無愧の此の身にて

まことの心は無けれども
弥陀の廻向の御名なれば
功德は十方にみちたまふ

昭、二十六年
昭、二十六年七月廿日

心光のあはれ

昭、二十六年
まことなき身をかへりみず世に立ちてまことありげなる此の身淋しき

御仏のまことのいのちしみじみと身にしみわたりただ

まわす、様々の善巧方便をめぐらして、遂に私の心の眼がさめるまで私を呼びさましたまうのであると、此の頃の私はしみじみ感ぜずには居られぬ。

唯今の私は肉親のおもい出の裡に大悲の攝化を感じる。まことに父母存生のむかしを追憶すれば、父母の一言一行がひし／＼と私の身にせまつて来る。

年ふるままに身にぞしみける

明治天皇の御製はまことに唯今の私に對しての御教であらせられたのである、父の庭訓、父の言葉の数々を想い起す中にも、不孝の私は父が死ぬる一月ほど前の言葉をおもふ毎に断腸の感に打たれる。「政雄は父親の容態のことを少しも心にかけてくれない」という父の言葉、それに対して「いや心にかけて居ります」などと答えた浅薄な私の心、親を忘れ親をすて、居りながら、忘れて居ないと思ひあがつて居た私の態度、すべては親を捨て、行く窮子の私であつたのである。

それならば今の私はほんとに親心をおもひ親の膝下にかえるといふことになつて居るであらうか。否私は親心をおもふなどと言つて居るだけ、やはり親心を離れて行つて居るのである。三界のうらぶれの子、龍宮城からかえつて居る浦島の子なる私はどこまでもさまよい行く私である。そ

こころはつらき物あり
あぢがたをなす深らしい

念仏す

昭、二十八年十月二十四日

三界に家なき身なり御仏をたのみまつりて住みうつり行く

昭、二十八年十二月二十四日 歳 晩 述 懐

うらぶれの年は暮れ行けどまことの道 ひとすらに進む心は止まず

斯の道やわが進む道日本の本の国の力となりぬべき道

昭、三十年

人の世のさかしき道に老の身をむち打ちて歩む一日、ひとひよ

御仏のとはのひかりのなかりせばさかしき道におほれ伏さましを

昭、三十三年

かへりみる五十余年のたましひの辿りのあとに心光照らすも

七十路の齡経ぬれど矩を踰えずと孔子のたまふ心境は遠し

見敬得大慶

井上善右工門

「見て敬い得て大いに慶ぶ」とは大無量寿経下巻の偈句ですが、親鸞聖人が特に感銘をもってお読みになったと察しられるのです。正信偈にはこれにもとづいて「獲信見敬大慶喜」の句が現われており、正像末和讃にも同じところが讃じられています。

(一九五)

ここに「見」とは信心のことでありますが、なぜ見の字を以て語られているのでありましょう。信心ということが一般に、ただ無条件に信じ込むことであると思われることが多いためですが、それが真実信心への道を妨げていると思うのです。信心とは決してそのような架空な心情を意味するものではありません。

今ここに「見」とはもとより眼で見ることではありませんが、眼で見ることと心において見ることです。例えば噂で聞いていた人に対面するがごとくです。話ではなく事実となることでもあります。言葉をかえると招喚のみ声をまじしく聞く身になるということです。甲斐和里女史の詠に、

谷ひとつへだててなげど心して きけばきこゆる山
ほととぎす

というのがあります。山の向うでほととぎすか啼いていると聞くだけではないのです。よく／＼聞けばその声が、今ここに立つ私のこの耳に聞えて来るではないかと詠われているのです。人伝に聞いただけなら別の人がいや啼いてはいないと言えはどうなるでしょう。現にきく人にとつてはわが耳にきこえる事実を動かすことは出来ません。ルソールが「宗教の否定者は聾者である、内面によびかけ響く声が聞えない人である」といつているのは面白い言葉です。清沢満之師が「宗教は目前にあり」という一文を草しおられますが、それもまた「見敬」のこのころを語らうとされるものです。信が「疑蓋無雑」といわれることは、最早や疑うにも疑いようがないことでもあります。

次に「敬」ということですが、敬いということとは、敬わずにおれない尊さの前に立ったとき起る直接感情です。如

わいてくる

384 B.C.
322

来の真実心に目みえたものは心から敬わずにはおられませんが、親の有難さを全く感じていない子に親を敬えといつても無駄なことです。言葉に終る教育はむなしいものです。実感につながって敬いは生きたものとなる。かくて「見」と「敬」とは離すことのできない一連の事柄となります。ついでに次の「得」という一字ですが、それはたゞわが手に得るといっただけの意ではありませぬ。一体われ／＼は真に得べきものを得ているではありませんか。人間は得んとしてあくせく心を勞します。財・名譽・地位等に向って懸命に獲得しようとするのですが、カールブツセの「山の彼方」の詩のごとく、山の向うに幸ありと、われも人も共に求めて馳せゆくのですが、「涙さしくみ帰り来ぬ」という結果を招きます。得てしかも幻滅の悲哀に陥るのは、目ざすものが真に得べきものを得たのではなかったからであります。凡そ人間が幸福と思うて追求しているものは、こうした類のものではありませんか。人間にはもつと大切を得べきものがあるはずですが、この事を心して思量せねばなりません。これについてアリストテレスが暗示に富んだ説話を残しています。ここに一人の人があつて心ひそかに世界一の名馬を願ひ求めているとする。その人が財を得、地位を得たとしても、その人は心からの満足を覚えることが出来ぬ。何となく物足らぬ感じを如何ともすることがで

きない。ところがその人が遂に、名実共に世界一の名馬を見つけてこれを手に入れたとき、その人はこれをこそ求めていたのだと、自から膝をうって心からなる喜びに浸るであらうと語っているのです。これが真に得べきものを得たときでありましょう。あれかこれかと探し廻つても真に得べきものを得るのでなければ、究極の満足をえることは出来ませぬ。聖人が曇鸞讃に「無碍光如来の名号とかの光明智相とは無明長夜の闇を破し衆生の志願をみてたまふ」とうたはれたのは、その事を明したまう讃嘆であります。人間は人間のいたかく根本問題を解決することなしに、人と生れた真の志願を満足することは出来ませぬ。

得べきものを得たとき、何ものにも代えることのできないよろこびを覚えます。そのよろこびは、今までの欲望を満したときのよろこびとは質を異にするものです。哲人カントが欲望というものは満せば満すほどその満足が靴底のようにすり切れてゆく、と云っています。まさにその通りです。真のよろこびはたとえ感情的に燃えるようなものではなくとも、他の何ものにも比することの出来ないものですから「大慶」と語られていると感じます。極まれる芽出度いよろこびであります。

「見敬大慶」をうけて大経には、「則我善親友」と言われています。「則ち我が善き親友なり」と如来がよろこび

分不相忘なり
もつたいない

讃えたまうとあるのです。おおけなきことです。有難くも勿体ないことです。聖人はこの人を「如来と等し」とまでたゞえられました。如来と並び立つほどの徳をたまわるといふことです。それを現生十種の信の益として信巻には示されました。文類聚鈔には「現生に無量の徳を得る」とも申されています。この徳益を身に体し生活に味うところに、真宗念仏の無限な真実性の発展があると深く感じるので

(昭和六十年十月三十一日)



慈光日誌抄

身は娑婆にありつつも

〔昭和六十年〕

さる十月は忙しい日々がつづきました。そのため、ともすると疲労がち。それで、つづつ反省させられたことは、少しは自分の年のことと、身のほどをわきまえて、お申込みの講話の引受けは極力、控え目にする事、そのことを自分に言いきかせる。殊に、ついつい受諾する甘い心情の裡には、名利に人師を好む、まことに恥ずかしい思いのうごめいていることとごぞいますから。まったく、なんまんだぶつ。

今年も亦、年の暮を迎えようとしております。まったく南無阿弥陀仏——汝一心正念直来のおん喚び声に、生き生かされる身の幸せを憶うことの多い昨今の日日であります。

十月の中旬には、アメリカの加州から前後して二組の方々が入洛なされる。その中の一組はロスアンゼルス清水しげる婆さんと万里さん。しげる婆さんは九十五歳で「慈光」誌の長年の愛読者、花田先生とのご縁も深い方である。

良寛和尚の歌
手を折りて昔の友を数ふればなきは多くぞなりにけるかな

老が身のあはれを誰に語らまし杖を忘れて帰る夕暮
うちつけに死なば死なずてながらへてかかる憂き目を見るがわびしき

何故に家を出でしと折りふしは心に愧じよ墨染の袖
いざここにわが身は老いむあしびきの国上の山の松の下いほ

比丘は唯万事はいらず常不軽菩薩の行ぞ殊勝なりける
石榴七つ贈られし返礼として
くれないの七の宝を諸手しておし戴きぬ人のたまもの

西元宗助

よくも来られたもの。

このたびの来日は、女婿の兄利演正博士の日本での一周忌法要のためでありました。演正博士は加州大学ロサンゼルス分校の東洋学部長を長年つとめた仏教学者で、アメリカでは著名。アメリカの西本願寺開教使も、かつてはその指導を受けた恩人で、わたしも渡米した折、大変お世話になりました。この次はお浄土とお別れに際して婆さんと固い握手をする。すると万里さんも曰く、この世のおつきあいは三、四十年。でもお浄土は俱会一処、しかも永遠いつまでもですから安心、とおっしゃる。さすがである。嬉しくなってニッコリ笑う。

もう一組は、パークレイの今村寅猛先生(元ハワイ開教総長)夫人のお妹のりりさんご夫妻。故松浦忍夫人の『悲願』の英訳出版の打合せのこともあってお会いする。いまだドルは安く、円は高く、出費が大きいので龍谷大学の稲垣文雄教授と、援助の仕方について打合せをする。松浦忍夫

人は、足利浄円先生と甲斐和里子夫人のご教化さうけた、まことに篤信の「在米日本人の母」と讃えられた方。その三周忌までにゼヒその英訳版を刊行したいとの御遺族の方々の発願。

十月二十七日(日)は池山榮吉先生忌法要の一道会。この日はまことに日本晴れの秋日和。産業大学の黒田直樹兄にお誘いだいて、同兄のクルマに乗せて貰い、金閣寺傍の観光道路を通り広沢池から大覚寺の前を、さらに嵐山の渡月橋を経て観光シーズンの雑踏の中をくぐりぬけて漸く浄住寺の山門の前に着く。

山門のあたりから紅葉のトンネルのかなたの御本堂を仰ぐ風光は、まことに清閑。お浄土の門に、われ立つとの感がしきりにする。一步一步、参道の階段を昇って、まず御本堂に拝礼。ついで池山先生の名号碑の前に額すく。表面は南無阿弥陀仏、岩の裏面は汝一心正念直来、そしてそのわきに、オネガヒダカラスグキテオクレヨと、すべて池山先生の御筆跡が彫つてある。

南無阿弥陀仏の本願の名号は、み仏のわれを呼びます招喚のおん声である。それを善導大師は、われらのために、「汝一心正念にして直に來れ、我は能く汝を護らむ、すべて水火の難に墮することをおそれざれ」と仰せになったの

けに、あらためて追悼したことであります。

最後の井上先生のお話。それは本誌十月号の兄の玉文「正定聚の徳」に基づかれたもので、兄の恩師自井茂允先生を偲ばれての懇篤なご法話。殊に「慶ばしいかな、身は娑婆にありつゝも既に浄土の光耀を蒙る」のお言葉は、ありがたい極みでありました。

それにしても恥じ入ること。わが身は、なんと邪見にして慚慢であることか、井上先生も川畑先生も徳草師も東昇博士も、みんな自分と対等な友人扱いにしているのではないか、いや、ひよっとすると、自分のほうが思っているのではないか、まったく恥ずかしきかぎり。

帰途、ふと思いましたこと、今日、お参りくださった方々も、みんな、娑婆応現の化仏化菩薩にましますのではないかと、ひそかにお念仏申させていたただいたことであります。ほんとうに有難うございます。

み仏を呼ぶわが声は

み仏のわれを喚びますみ声なりけり

(甲斐和里子)

であつた。その大悲をしみじみいただいてお念仏申す。さて御仏間の会場の庫裡に参りましたときは、既に榊原徳草老師の読経はすみ歎異抄読誦の最中で、座敷はぎつしり一杯の方々。東は富山からも東京からも、西は長崎からも博多からも、すべて池山先生と一体なる徳草老師を慕つての群参の方々でありました。

まずは老師のご挨拶。驚く勿れ、八十五歳になり給うと背は曲つてしまつておられるが、しかしお声はお元気で、花田先生のご法話を代読され、次いでご自督の法話を述べられる。わたしも命ぜられるままに、一昨年還浄なさつた木村無相さんのことを偲びながら、少しだけお話させていただいて、あとの川畑愛義、井上善右衛門両先生のご法話に耳を傾ける。

殊に川畑先生が従弟の東昇博士——ウィールスの研究では世界的な権威であつた。——その東博士がいかにか池山先生に師事して獲信したか、殊に最晩年——臨終直前の思想と信仰の一端を紹介されたのは、まことに感銘の深いことでありました。ついでながら、『在家仏教』(四百号記念増刊号、昭和六十年十月刊)に、「生と死」と題する花田、東両先生の対談(昭和五十年)が再掲載されているので紹介させていただきます。東教授は昭和五十七年十月二十六日の逝去。惜しい男を早く亡くしたものと、そのお命日の翌日でありますだ

歌集

含紅集

吉野秀雄

慶応中退

八幡前の葉舗主人が妻にわれの悔み述べつときくはほほえまし

足奏へて三とせなりけり目の先きの八幡前も足は歩まぬ

噂には死にきと決めて居らめどもうはささるるはありがたき内

世にわれの在りも在らずもひとしけむさりながら今消ゆらくはさびし

一生はただ刻刻の移りなり刻刻をこそ老いて知りつれ

わが命やがて尽きなむさりながらゆるがせにせじよその消ゆる日まで

『法燈』——病中雜記

三十一卷五号
酒井演幽

日ごろの冷血漢、涙のない我である。長い病床で涙もろくなつたのかとも思う。それでも有難さに泣いたり涙したりすることのない我身である。それがどうしたことか今日ばかりはお慈悲の尊とさに泣けて仕方がない。涙のとめようがない。家内も泣いているようだ。誰もいないなら独りで腹一杯泣きたい。いつのまにか声をたてて泣く。一生涯やるせないお慈悲を人さまに聞かせることに力をいれ他へ振舞うことのみに終始して勿体ない申しわけがない。今日ばかりは私一人へのお慈悲であるみ仏さまとさし向いである。「弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり」今こそ悪業の演幽一人へひしひしと味はれる。「仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりと知られていよ／＼たのもしくおぼゆるなり」との聖人のおよるごび、真に、他力の悲願はかくの如きの演幽がためなりけりと思わず声を立てて泣いた。涙は

とめどもない。そして半ば過去の横着な不浄説法の慚愧である。

悪業深く今もつて全治に至らず業さらしの日常を送る。「そくばくの業をもちける身」を見おとさんとするこの身にお手きびしいご催促である。「助けんと思召し立ちける本願のかたじみなさま」と病苦を縁として大悲を仰ぎ自己の業因の深さを凝視せしめられる。

火のついたような痛みが続く。排尿は一昼夜に三十数回。その度ごとに一度々々が最初の経験のように激痛を感じる。痛みを馴れて痛みを感じないようには少しもなれぬ、生きているからである。然るに聞法には同じお話が繰り返されることとしたる感興をひかない、魂の麻痺している証拠である。恥かしくいたましいことだ。

信に上越す幸福が人生何処にあらう。無上無対である。地上の幸福はすべて変化する。時と処とに支配される。この幸福は常恒であり不断であり全部であり永遠である。

手術台上上つては閻魔の前に罪業の裁きをうけるに等しい。病室にかえつてやれ／＼六道の辻にて地藏菩薩のお情けの袖に抱かれるに等しいとしみじみ感ずる。その役目を家内がうけて持っている。

手術室に入るや子供は七転八倒して泣き叫ぶ。目前の恐怖と苦痛より逃げんとするのである。医師や親はこの子の現在より将来にわたつての病患を除き真実の健康を与えんとするに、その真意は小児には理解し得ようもない。同様なことが地上の人間の大半に存するかと思う。目前の苦痛、現前の境遇にのみ目がくらみ悲しみもだえ恨み呪い、そして自他ともに不幸を倍加してゆく。今の苦痛、現在の境遇の由つて来れる処を静観し、現在より将来への本質的な幸福、永遠なる生き方への教養と慈育、これを正法と云い、また聞法仰信の生活と云う。

看護も真に難行であり苦行である。感謝せざるを得ない。

病者の苦をなけば受持つ所謂代受苦の菩薩であることを痛感する。

菩薩：大慈代受苦

一、金森の善従に或入申され候。此間こそ徒然に御入候ひつらんと申しければ、善従申され候。我身は八十にあまるまで徒然といふことを知らず。その故は弥陀の御恩の有難きほどを存じ和讃聖教等を拝見申し候へば心面白くもまたとふときこと充滿する故に、徒然なることも更になく候と申され候由に候。

このお言葉をしみじみ味はせて頂く。療養生活一年七ヶ月に余る一日として退屈して自己を持てあます折とては一度もない。日々を新しく晴ればれと迎え送らせて頂いてきた。これ一つでも幸せなことであり救われたことである。せまい病室が広い宇宙につながり、究極であるべき寝台が無碍の法界に融通する。まことに仏天の加護、大悲攝取の実証と申すべきである。

三十一、同じ仰せに曰く。心得たと思ふは心得ぬなり心得ぬと思ふは心得たるなり、少しも心得たりと思ふことはあるまじきことなりと仰せられ候。されば口伝鈔に曰く、さればこの上になもつところの弥陀の仏智をつのらんよりほかは凡夫いかでか往生の得分あるべきやといへり。

四善悪二業の事

道は無限であり無限の道に生かされる自己は常に無である苦である。真空こそ妙有をはらむ。真理は一つである。如来無限の大悲に生かされる信は、真空であり、機は「地獄は一定すみか」であろう。限りなき父母の恩によびさまされし子の心眼に映ずるものは、自己の不孝の罪の深さと親の御恩の偉大さである。

一、人はそらごと申さじと嗜むを随分とこそ思へ、心に偽りあらじと嗜む人はさのみ多くはなきなり。又よきことはならぬまでも世間仏法共に心にかけて嗜みたき事なり云々。聖教のみ前に省みてただ慚愧あるのみ。嗜まんと心がけつゝも申すことにさえ偽多く、況んや心中邪悪のみ妄念のみ。ああ如何ばかり大悲のみ胸いたまれますことか、如何ばかり不懲よと思召したまわん。

すべてのものは一切余すところなく親様よりの賜りものに外ならぬ。然し我にはかくも過分に頂いてよいものであろうか。冥加につきる。過分すぎるこの重荷を今少し軽く生かして頂きたい。矛盾な心の動きに或る意味において悩む。心苦しさを覚える。最後にはただ合掌してお念仏の外に術もない。自己の罪の深さを思い同時に大悲護念のかたじけなさを仰ぐばかりである。結局「妄念の外に別に心は

木村無相師の御法信(二)

自分の業煩惱の深いことを、だんだんと如来のお光明、お念仏様に思い知らされて来ると、「転悪成善―悪を転じて善と成す」というようなことになってくるが、それと同時に、マスマス業、煩惱の深い、強い自分であるということをお念仏に知らされ、ますます「お念仏」よりホカない身ということが思い知らされてくるのですよ。すこしでも、自分がよい方向にむかっただと思つのは「自分のウヌボレ」であつて、ワレワレ凡夫のココロというものは、そんなナマヤサイイものではなくて、スグに「ウヌボレ」信者や、妙好人にちかよつたように思われ、この世も「お浄土」と思われるように、酒でいえば、よっぱらつたような気持ちになるのですが、それほど、我が身知らずの「ウヌボレ」やなので、そうしたワレワレ凡夫であるから、聖人の、「ねてもさめてもへだてなく、ナムアマミダブツをとのふべし」とおおせられたのでありましよう。それは、お念仏さまは、「智慧のお念仏」さまであるから、わが身の「ウヌボレ」

なきなり」との源信和尚のみ教えを思う。妄念邪悪、これが私の全部であることを反省せしめられる。無量光のお照しによるのであろう全的に力強くありがたくたのもしい。お念仏一つでと、一切をひつくるめてお念仏申させて頂く。無量寿のみ光のおいのちの流に浮ばせて頂いているに違いない。この縦横無限の十字路の中心点が一呼吸々々のこの私のお念仏であるように思われる。

昼夜病苦のため一声のお念仏も称え得ない罪業深きこの身である。第十八願衆生往生の本願に一声の称名をも往因として求めましまさぬみむね仰いで感涙にむせぶ。根機つたなしとて卑下すべからず、仏に下根を救ふ大悲あり、行業おろそかなりとて疑ふべからず、経に乃至一念の文あり、仏語に虚妄なし本願あにやまりあらんや」幾度苦悩の病中に胸底にくり返し味識させていただく。病みこやししみ名一声もとなへえず弘誓のみむねいよとふとし

極度の衰弱と高熱。目がまう。世界が廻る。目があかぬ。聞くことが辛い、一声の発声が苦しい。沈黙瞑目。光の刺戟のうすい静寂な暗さを望む。光雲無碍如虚空。闇を破る光と共にまた光を覆う雲霧もまた限りなき御慈育なることを味わう。

御法信文巻四七

岩崎成章

のヌカタがだんだんと見えて来て、すこしも、よくなっていない。ますます「信者」とか「念仏者」とかは遠い自分である。悪業生、邪見、無信の者であると自分のホントのスカタがわかつてくるからでありましよう。ワレワレオタカイは、スグに「ウヌボレ」でちよつと、ありがたいこととがあれば、とかく自分が「信者」や念仏者にちかづいたように、思いがちのおろか者ですから、思いついたら、ナムアマミダブツ、思いうかんだら、ナムアマミダブツと、自分にだけ、きこえるほどの声で、お念仏申させていたでいて、ウヌボレゴコロを、しずめさせていたでいて、まことに、「ソマツな自分である」というところから、あらためて、お念仏でなければならぬ自分を、思い知らせていただくことが大切と思うことです。そういうような、まことに「オロカナ」自分であり、「ウヌボレ」の強い自分であり、それであるから、ますますソマツな、助からぬ自分であるということをお念仏に知るホカ

巻末 291 首

い、——ということ「機の深信」といい、このよう自分分は「ただもうお念仏よりホカない」ということを知らせていたたくのを「法の深信」というのであって、ナニカ、特別の、ことではないのであります。自分という人間は、マツタクどうにもならん人間だなあ、と思ひ知らせていたただけるのは、御廻向の「信心」の「機の深信」のおハタラキであり、このような自分は、ますますただ念仏よりホカないなあ、とよくよく知らせていたたくのが「法の深信」なのであります。それが「御廻向の真実信心さま」のおハタラキですが、「機の深信」とか「法の深信」とかいう言葉をおぼえたり、そんな言葉をつかつて、話をしたり、手紙を書いたりしていると、知らず知らず「信者」や「念仏者」にちかづいた気もちになり易いので、「機の深信」とか、「法の深信」とかいう言葉は「信者」でも「念仏者」でもない自分には用のないものとして、ただ、

どうにもならぬ、

たすからぬ、

まことにおソマツな

ただお念仏をいただいてゆく
ということが大切とつくづく思うことです。

私はずもこのごろ、信心めいたものはなんにもなく、た

だ、ワケのわからぬまんま、なんにも出来ぬまんま、ただナムアマミダブツ、ナムアマミダブツばかりであります。

ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ

御 法 信 (三)

おかげさまで、如来、聖人さまはもちろんのこと、毎月来て下さる方々のオカゲで、七十八になって、やつと、ハツキリと、お念仏一つ、ただ念仏一つ、とハツキリさせていただけで、もうナンニモ、ホカにいらないになりましたので、いつ死んでもよいと思っていることです。それは、「死んだらお浄土だ」というようなことではありません。お浄土があるが、無かるうが、お浄土にまいれようが、まいられまいが、今、現在、こん日ただ今のボンノウばかりの毎日の生活のうちに、お念仏さえ、ただだけたら、これでもうジユウブンです。ということなのであります。もうナンニ一つ、モンクも、リクツもなくなりました。

このような生活の中に、お念仏があらわれて下さる、ということだけで、ホカになんにもいらす、ナンニモワカラナクても、これでマンゾクであり、ジユウブンであります。ホカにナンノゴリヤクもなくても、お念仏が申せるというだけ、お念仏さまが、トナエ、アラワレテ、下さるだけで、もう、ジユウブンであります。ホントにまあ、もうイクラ

も生きられない七十八になって、やつと、このこと一つ、ハツキリさせてただけて、一生苦勞して来たカイがありました。「無常、無常」で世の中のことナニかいろいろかわってゆくものです。その中で、かわらぬ「オマコト」はお念仏さまであります。さてお手紙によれば足の方、三ヶ月、ずつとつづけて、毎日通つていられるようで、しかしつづけてみなければ、その「キキメ」もわかりませんし、それでも、ナカナカなおらぬことです。御苦勞様です。御手紙に「仏様のおはからいで御座いますか、先生に御縁がありますよ、こんなに深くお知らせ頂く仕合せを喜ばせて頂いておりますとありますが、それはもう、なんといつても、如来聖人さまの「オハカライ」のホカありません。

オタガイのハカライや、考えでは、こうして長く、オタガイのごえんがつづくはずがありません、金沢にゆくようになり、いろいろの人と知りあいましたが、谷内さん一人がのこりました。よくよくのごえんであります。ありがたいいことです。オタガイに、聖人のおすすめの「お念仏」が申されるようになりまして。

それに今回のお手紙で、はじめて「お浄土」のこと、書いて来られましたねえ。この愚痴ばかりの私ですが、此のままお念仏一つで、お念仏力によって、極楽お浄土へまいらせて頂けるとは、何と不思議な大悲の御本願様で御座い

ましようか。ホントに「不思議な御本願様」であり、「不思議なお念仏様」です。それで「歎異抄」をいただいても一番はじめに「弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて往生をばとぐるなり」とあり、アトアト第十一條には、「誓願不思議」あり「名号不思議」ともありますが、「仏法不思議」とか「因縁不思議」とかいうお言葉もありません。ナンニモカモ、考えれば「不思議、不思議」のホカはなく「今、生きてゐる」ことも、今「谷内さんは、谷内家におり」「私は和上苑にゐることも」「フシギフシギであります。ワレワレ凡愚にわからぬ「因縁フシギ」のオカゲでそれらの「因縁不思議」とはなれずに「弥陀の誓願不思議」がはたらい下さるのであります。

オタガイ「業、煩惱の深い、強い、はげしいオタガイ」が仏法のごえんにあひ、お念仏喜ぶ身にさせていただいていゝことは、よくよくの「弥陀の誓願不思議」のお力で、ワレワレは、はじめ「往生」とか「極楽」とか「お浄土」とかぜんぜん考えていなかったのに、トシをとり、無常を思い知らされ、お念仏は、ただ今生の苦しい時の「神だのみ」ではなく、他力自然に、お浄土にまいらせて下さる大悲のお念仏さまである、お大悲さまであるということも、トシと共に、病苦とともに思い知らされるようになって、まことにまことに、よくよくの御恩「誓願不思議」です。ねえ。

お手紙につづいて、此の世の生活がたらくて仏法を聞か
て、世もらわずにおれませんでした、死んで極楽参りをした
いからと思ってお参りしたことは一ぺんもありませんでし
た、ただこの世がたらくて仏法にあわせて頂いて居りまし
たのに、今、体がおとろえて不自由になって始めて、無常
ということから、死んだら、お念仏力によってお浄土まで
もまいらせて頂く仕合せとは、今やつと、気付かされて居
ります、「業なり、御恩なり」と深く味わわれて居ります。
とあります、そのことは、私も、まったく、谷内さん
と、同じであります。法然上人様でしたか、「生けらば念
仏となふべし、死なば浄土にまゐるべし」とおせられ、
又、死ぬではない。生まれるのであるぞよ」とのおさとし
どのこと——。

香樹院さまの「御法語々録」の中に、次のように仰せ下
さっております。

一、宝は念仏にあり、現世に、無量の徳を得て、後に、浄
土に生まるる因となる。功德の上なき宝は、南無阿弥陀
仏なり。この念仏を称えられぬ身の上もある。しかるに、
朝から晩まで、称えても、さしつかえなく、笑い、そしる
者もなし、よくよくの御慈悲なり。深き宿縁なり。生死は
なるる時節到来と思えば、心安樂。とあります。このむ
づかしい世、この業煩惱の身に生きて、念仏申さるるとい

歎異抄第五章

親鸞は、父母の追善供養のためと思つて、念仏をまうし
たことは一遍もない。そのわけは、すべて生あるものは、
いつかの生、いつかの世で、互に父母ともなり、兄弟とも
なったものなので、誰も彼も、この順次の世で、自分が仏
となつたうえで、初めてたすけてあげられるのである。一体
念仏が自分の力で励み努める善根でもあるのなら、それ
はなるほど、自分の称える念仏の功德を廻向けて、父母を
たすけるということも出来ようが、そうしたわけのもの
ないから、ただ自分の計らいをなげすて、速く御浄土へま
いって、覺を開かせていただいたなら、たとへ彼の人々が
地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道や、胎生、卵
生、濕生、化生、の四生という迷の境界に沈んでいて、己が
罪業の報いから、どんな苦しみを受けていようと、今は
もう仏となつた我身に具わる自由自在な力で、巧みにちび
く方便を尽して、先ず第一に、縁のあるものから済うこと
ができる、と聖人はおおせになりました。(池山先生意訳)

うシアワセの上に、死ねばお浄土という身にさせていただ
いて、この身この世にどのようなことがありましようとも、
シアワセというほかはありません。「歎異抄」第一条の一
番はじめに、弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて往
生をばとぐるなりとあるところをあらためて読んでみて
下さい。

「歎異抄」第二条のはじめから二行目に、念仏よりほかに
往生の道をも存ぜぬ」とあるところ、ただ念仏して、ミ
ダに助けられまいらすべし」とあるところをくりかえしく
りかえし、口に出して読んでみて下さい。私のところに来
る人、まだどなたも「念仏念仏」とお念仏がいただけるこ
とになやんでいられますが、「念仏往生」、お念仏は「往
生極楽の道である」ということを、喜んでいられる人は一
人もおりません。今の時代は、特にお東のごえんは、今生
のことばかりのハナシで「浄土往生のハナシ、死ねば浄土」
というオハナシは殆んどなく、それを喜ぶ人も、いたつて
マレなように思うことです。谷内さんは、おいおいと一層
「生けらば念仏申すべし、死なば浄土へまいるべし」のお
ことばを、病苦につけても味わせていただけることになる
であります。

ナムアミダブツ、ナムアミダブツ

花田正夫

聖人は若くして父母に別れられ、叡山に登つて仏道を求
められたが、当時の仏教のならわしとして、亡き父母の追
善供養の道もたどられたことであろう。然し、

外儀のすがたはひとごと賢善精進現せしむ

貪瞋邪偽おほきゆる 奸詐も、はし身にみたり

悪性さらにやめがたし ころは蛇蝎のごとくなり

修善も雑毒なるゆゑに 虚仮の行とぞなづけたる

と悲歎述懐和讃に慚愧せられたように、雑毒、虚仮の範
疇からは出られなかつた。そこに弥陀廻向の本願の念仏一
つを法然上人から聞きとられて、念仏成仏の道に帰られた
のであつた。この深刻な御体験から「父母孝養のためにと
て一遍も念仏申したる候はず」と述べられたのであろ
うと愚考している。

孝養父母、奉事師長等は大切な行であつて、しなくても
よいと仰言つてはいない。唯その道一つも徹底して実行が

出来ない身との表白である。しかもこれを仰言るには、他力廻向の大善大功德を身にうけていられるからである。

この徹底した聖人の慚愧の声に福間甲松氏が開眼せられたと伝聞する。父上の福間久米吉氏は広島島生れであるが、資源の乏しい日本は、外国と貿易することによる外に発展の道なしと気づき、外人商社に入り、やがて貿易商となり神戸に本社を置き、東京に支店も開いた。然しこれからという時に、下顎骨にガンが出来、八回も手術した挙句亡くなった。その六回目手術の時、段々痛苦も増した際、遂にその切なさのあまり、長男の甲松さんに「お前は偽孝者だ。わしに相談もせずに手術ばかりをさせて、みんなやぶつたかつてわしをなぶり殺しするのか！」と、愚痴のありつたけをぶちまけた時、彼はそれまで数珠をかけて看護に専念していたが、こうまでしても父は解ってくれぬのかと思うと、遂にその数珠が切れてあたりに玉が散った。その刹那にこの聖人の仰せが身に沁み、念仏にかえた。そして、親孝行の数珠が切れて、その大不孝者を涙をもっていだいて下さる方があったと随喜せられた。

白井成允先生は仙台の第二高時代に、母上が亡くなられた。その後、幼い時から自分が病弱であつたために母に苦

父は私が本当に幸せになることを何よりもよろこんで下さって居たと改めて知らされ、子は親に對立しているが、親は子と二而一、一而二であつたと気づかされた。

次に「一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり」とあるが、行基菩薩は、母の喪に三年ふくしでのち、

ほろ／＼と鳴く山鳥の声きけば、父かと思ふ母かと思ふも

と詠じられた。又松尾芭蕉はすでに亡き父母の家に帰りふるさとや 隣に泣く年の暮

と誌し、高野の山におまいりしては、

父母のしきりに恋し雉子の声 という一句をのこしている。

私のような鈍感な人間には、そうした敏感さはないが、両親を亡くしてはじめて、年配の男の人に父、年配の女の人に母をほのかに感じているのを見出し、この法語をそのままただけるようになった。

それと同時に「たゞ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦しきなりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなり」との仰せも、今まで軽く読みながしていたが、いのちは法の宝と云われるように、八十すぎ、老化の波にさらされるにつ

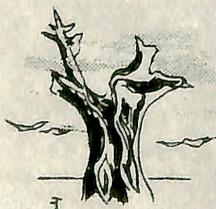
労をかけ、そのために早く亡くなられたと悲しみ、母いずこと求め、初め土井晚翠先生の勧めで聖書を読まれたが、信ぜよされば救はれんとあるけれど自分は努力すれば信じられもしようが、亡き母上は信ずることは出来ない。この母の救いの道はないかとの切ない願を持たれた時、三好愛吉博士の御手引きで近角常観先生をたすね、熱心に聞法せられたけれど、頭で解つても身につかず、それも、自分の不真面目によると行き詰つて、そのまゝを近角先生に訴えられた時、「私は一度でも真面目になれと云いましたか？真面目になろうとしても真面目になれぬ我々を、私はよく知召して、その者を憐れむで下さるお慈悲であります」とのお答えに、仏の大悲一つと気づかれたのであつた。そして母は私をいのちにかけてお導き下さつたと御礼申されるようになられたのである。

私自身、二十四の秋、はじめて限らない仏の大慈悲心を知らされ、嬉しさのあまり寝られぬ夜の明けを待つて、父の墓前に生れてはじめて御禮まいりをし、「お父さん、最後の時まで私の事を御心配下さいました、どうぞ御安心下さい。これからどうした業報があらわれましようとも、仏様に手を執られて念仏裡に下させて頂きますから」と心につぶやいた時、父の満足した面影が浮かんだ。そして、

この還相の廻向の御誓を聞くにつけて、若しこれが無かつたならば、死んでも死にきれぬ苦惱におちるに相違ないのに、これあつて、名残りを惜しみながらも、有縁の人々と死を超えて、永遠の手を結ばせていただけることをこの上もなくありがたくいただくようになった。

いづれの行も及びがたく、小慈悲もない身で父母をたすけるなどとはとんでもないことであるが、こうした親不孝の私共を憐れんで下さる弥陀仏の大悲ひとつにたすけられ、その私をたすけて下さる仏力によって、父母をはじめ有縁のあらゆる人々もおたすけただけなのだ、ひとえに他力を謝すばかりである。

近角先生も「どうかこの近角に目をつけなさい。近角は業縁次第ではどうしたことをやらすかすかも知れないが、この身を憐んで下さる弥陀の願力を仰いで下さい」と申され、飽くまでも自分は月を指さず指にすぎないと述べられたとお聞きしている。



五

ツチイリンキチ 明治四一昭二七
土井林吉 天地有備晚鐘

さむきわが射程のなかにさだまりし 虚根の雀は母も知れぬ 空には木(昭和三年)所収 青山修司

68.1.15 折角

あ と が き

新刊書紹介

木村無相著 「歎異抄を味わう——信の交流」

全 上 定價 一、八〇〇円 送料 三〇〇円
求道六十年「歎異抄を生きて」
定價 一、五〇〇円 送料 三〇〇円

發行所 東京都千代田区内神田三ノ一七ノ八
(小山ビル) 光雲社

振替 東京 五一一五八九八七

念仏者の手記 (三冊)

安波 勲八 信仰体験録 一、〇〇〇円

○ 誉田 豊吉 聞思録抄 一、二〇〇円

○ 清水 清吉 法悦抄 八〇〇円

——開光願生・他——

發行所 京都市左京区高野泉町四〇

振替 京都 七七三四

60-81
61-82
62-83

歳末となりました。私も八十二を正月に迎えます。皆様の御念力に支えられて老病の身を生かして頂き、唯十方を合掌の外はありません。ナムアマミダブツ。

楠

近角先生の絶対他力の真教は、とかく相対的他力と誤解され易い点を指適して下さり、反省させられました。

福島先生の浦島の子は、年と共に私自身亡き親に対して持つ心の鬼を照らされ、ことに歳末感深いことであります。先生は「まことなき身をかえりみず世に立ちてまことあげなるこの身淋しき」とも詠じられました。

井上先生の見敬得大慶は、地上にならぶことのない慶びを仏より恵まれることを明記して下さいました。

西元先生は寸暇もなき御生活の中から信味の数々をいただき、私自身の懈怠を恥じております。

酒井演幽師の病中雑記は、死を前にされて正直に自己の姿を表白して下さい、私共のやがて行かねばならぬ旅の大きな枝折りを頂きました。凡夫が凡夫のなりにつくらわず飾らず歩ませて頂けるのも大きなめぐみのお蔭であります。

木村無相さんの法信、岩崎師の御苦勞によって頂きました。浄土から照覽下さることでしよう。

歳末の御挨拶もお念仏でさせていただきます。合掌

定価 半年 八〇〇円(送共) 一年 一六〇〇円(送共)

愛知県西加茂郡三好町大字福谷 印刷人 天野昭夫

名古屋市南区駈上二丁目高し元 發行所 慈光社

編集・発行人 花田正夫 振替口座 名古屋 六一三三三番

電話 八二局七〇三七番 郵便番号 四 五 七

慈光 第三十七卷第十二号 昭和六十年十二月十五日発行 (毎月一回・十五日発行)
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可